

白への恐怖、黒へのあこがれ

——ウィンキン・ド・ウォードの標題紙（1）——

Not white, but black ;
title-pages made by Wynkyn de Worde (1)

高野 彰

要 旨

ウィンキン・ド・ウォードはイギリスでその生涯を印刷、出版に捧げ、総点数700点を越える本を出版している。この点数を出版すること自体大変な努力が求められるが、出版するにあたり努力していたことがもう一つあった。それは標題紙の採用と、それをどの様に表示するかという問題である。彼は当初から試行を繰り返したが、1501年になると文字表示だけの標題紙を止めただけでなく、その後16年に渡って使用を中止してしまう。それに代わって用いたのが木版の絵を併用した表示形であった。

1517年になると再び文字表示だけの標題紙が使われ出すが、この標題紙表示には明白な特徴が表れていた。それは、木版の絵を併用した表示にも見られる「ページいっぱいの表示」であった。そこでこの表示思想に基づいて、ド・ウォードの使用した標題紙を調べると、先の目的を達成するためにさまざまな工夫の施されていることが分かる。それらとは木版の絵、木版の大型文字、1行や2行と言った少数行の書名を挿入できる空洞の「巻き軸」、さらには「出版地、出版者名」や「here'説明文」といった追加表示である。これらは標題紙の飾りとみなされがちである。しかしそれらはド・ウォードにとって「ページいっぱいの表示」をするための工夫にすぎなかったのである。(続く)

1. 序

本の顔といえは標題紙を指す。その顔にすっきりとした化粧を心がけるのは現代人のおごりであろうか。現代の標題紙は文字を使ってすっきりと表示しようと努めている。しかしこの表示思想を嫌ったばかりでなく、この表示形を突然中止し、あまつさえ16年間も使用しないという興味深い行動に出た人がいた。そしてすっきりした表示とは正反対にページ（標題紙）を埋め尽くし、余白を残さない表示を心がけた。その人とはウィンキン・ド・ウォード（Wynkyn de Worde）である。

ド・ウォードはその名前からロレーヌ公領ベルスで生まれた。彼はイギリスの創始印刷師ウィリアム・キャクストン (William Caxton) についてイギリスに渡り、彼の印刷工房で仕事をしてきた。そしてキャクストンが1492年の初頭に死去すると、ド・ウォードはその年から印刷を始めている。しかしこの年はわずか2点と、出版物は少ない。キャクストンの娘婿から訴訟が起こり、仕事どころではなかったためだと言われている⁽¹⁾。ド・ウォードは1492年から出版物を出し、爾来、死去した1535年まで、40年以上の歳月を印刷・出版に捧げてきた。その間に出した出版点数をベネット (H.S. Bennett) は828点と推定している⁽²⁾。薄い厚いは別として、単純計算で年平均19点余りも出版したことになる。現在の1出版社当たりの平均出版点数と比べても、決して遜色のない数字である。これだけの点数を出せたのは、前述の訴訟が決着し、キャクストンの印刷資材を引き継いで活用できたからであろう。しかし資材があっても、活用するかどうかは個人の意気込みである。ド・ウォードの気力と活用能力とが相俟って、828点という結果を生んだといっても過言ではない。

ド・ウォードの総出版点数828点の内、640点余がマイクロフィルム化されている⁽³⁾。これをもとにして彼の用いた標題紙の様子を一覧にしたのが表1である。表1 (巻末) の構成は「初期英語本標題紙史序説」⁽⁴⁾ で詳述したが、本稿でも略述しておく。大見出しは「標題紙を用いた場合」、「本文がすぐに始まっている場合」(表では「PT」(パラグラフ書名)と表示。), 「巻頭の様子がはっきりしない場合」(表では「NON」と表示。) の3項目である。そして「標題紙を用いた場合」は4つに細分し、「文字だけで表示した形」(「文字」と表示。), 「「HERE」で始まる表示形」(「HERE」と表示。), 「そこに木版の絵を加えた形」(「絵」と表示。) そして「標題紙全体を囲み飾りで囲った形」(「囲飾り」と表示。) と見出しを立てている。「「HERE」で始まる表示形」では、この中を2つに細分し、「文字だけで表示した場合」(「文字」と表示。) と「そこに木版の絵を加えた形」(「絵」と表示。) にしている。

各項目内は2枠が1単位で構成されている。例えば、図1-1 (stc.254, 1510年) は下記のような表示になる。

P254E	T 2, Imp 4, E, Epi 4
-------	----------------------

上記を読むと、左側の欄はstc番号と絵の有無を示している。「254」がstc番号で、「E」は「絵」付きという意味である。そして表示順序は「書名+絵」の順であることを示している。なお、書名の冒頭がパラグラフ・マーク (¶) で始まっているならば、それを「P」で示している。

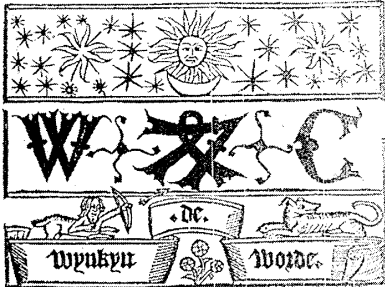
右側の欄は表示内容を略述すると共に、行数も示している。上記の右欄の

T 2, Imp 4, E, Epi 4

は「T」が書名で、それが「2」、即ち2行で表示されている。「Imp」とは印刷事項で、それが「4」行表示され、「E」(絵) 付きで、「Epi」(碑文) が4行表示されているという意味になる。かつ、こ

¶ Manus de parabolis. Alias doctrinale af-
 tum / cum luculenta glosarum expositione.
 Londonis nouiter impressus per Wynan-
 dum de Worde in parrochia sancte Margi-
 de in vico anglie nuncupato the fletestrete
 ad signum folis aurei commozantem.

¶ Otus. Parabolozum.



¶ Epitaphium Mani
 Manum breuis hora breui tumulo sepeluit
 Qui duo qui septem totum qui subdidit orem
 Scite suum, mores dare vel retinere nequit

図1-1 (stc.254, 1510年)

図1-2 (stc.13829, 1500年)

の順序で表示されている事も示している。なお、今後いくつかの表を提示するが、これらはいず
 れも時々为主题に合わせて表1から抽出したデータである。

P13829	1
--------	---

上記は図1-2 (stc.13829, 1500年) に対する表示である。左欄は標題紙がパラグラフ・マーク (P)
 で始まる文字書名だといっている。そして右の欄に数字しか示されていないことから、1行書名が
 何の飾りもなく表示されていることを示している。なお、これらの略語については表中でも説明
 している。

2. 標題紙の使用開始 (1493年)

標題紙とは本文より前にあって、本文から独立したページのことである。標題紙という工夫は
 フランス語本やイタリア語本などで試みられ出したので、それらの本を手本にして採用したとし
 ても、表示目的さらには表示方法がわからなければ、十分に機能させることはできない。標題紙
 の後発活用国であるイギリスにとって、標題紙に何を、どのように表示するかは重大な問題であ
 った。

表1によると、ド・ウォードは1493年から標題紙を使い始めている。この年号はイギリスにお
 ける標題紙開始年としては決して遅くない。1493年以前に標題紙を採用したのはMachlinia (1485
 年)、Leeu (1486年)、Quentel (1492年) そしてMorin (1492年) の4人だけであり、この点に関
 しては「十五世紀英語本標題紙史」で述べた通りである⁽⁵⁾。表2-1から分かるように、ド・ウォ

ードは標題紙を1494年にも1点使用しているが、その後は使用点数を増やし、毎年5点以上用いている。彼は出版開始とほぼ同時に標題紙を使用し始めているので、標題紙の使用を大いに意識していた事がわかる。

表2-1：「文字書名」と「絵付き」の使用件数

	1493	94	95	96	97	98	99	1500	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
絵付き	1	1	3	11	6	4	7	3	2	8	4	2	3	9	6	13	21	16	11	8	7	11	14	9
文字書名	1		2	3		2	1	3				1		2		2					1	1		

3. 「文字書名」の使用中止（1501年）

1500年まで、ド・ウォードは2つの形で標題紙を表示している。一つは、図1-2のような、現在よく見かける文字だけで表示する形（「文字書名」と略す。）と、もう一つは、図3-1のように、書名と木版の絵を組み合わせた形（「絵付き」と略す。）である。

ところが1501年になるとこれまでの状況は一変する。表1（そして簡略には表2-1）を見るとわかるように、1501年から「文字書名」の項がほぼ空白に近い。「文字書名」形という、現在のごく一般的な標題紙表示形があたかも砂漠の砂に吸い込まれた水のように忽然と消失し、1516年迄の16年間にわずか7点しか使用されていない。一体何が起こったのであろうか。

4. 「絵付き」への移動（1501年）

1501年からの標題紙の使用状況を詳しく見てみよう。表2-1からわかるように、1516年まではどの年を見ても、「絵付き」が複数点用いられている。しかも1509年、1510年さらには1515年のように、それぞれ21点、16点そして14点と、大量の「絵付き」が使われている。16年間に使用された「絵付き」の総点数は144点にも及ぶ。それに対して「文字書名」は7点しか使用されていないし、先の3年にいたっては全く用いられていない。1500年以前から「文字書名」が着実に使用されてきた事からすると、1501年からの「文字書名」の不使用は余りに不自然である。これでは1501年以降の「文字書名」はほとんど使用されなかったと言っても過言ではない。

1501~1516年間に用いられた7点の「文字書名」の行数は表3-1に示した通りである。この7点の「文字書名」には1行書名が1度も使われていない。

表3-1：1501～1516の「文字書名」の行数

年	1504	1506	1508	1513	1514
行数	3	6	8	2	4

これと正反対の動きをしたのが「絵付き」の1行書名である。表1の「絵付き」の項から1行書名を抽出した表3-2によると、はじめのうち1行書名は毎年1点ぐらゐの出版点数であったのが、1508年からしだいに数を増やしていく。点数が5点ともなれば、「絵付き」だけでなく、「文字書

名」も使うことで標題紙表示に変化を持たせられるはずである。ましてや1509年の11点ともなると、ますます変化が求められるのではないだろうか。ところが、前述したように、1行書名も「絵付き」でしか示されていない。

表3-2：1501～1534年間の「絵付き」1行書名の出版件数

	1501	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
件数	1	2	1	1		1		5	11	8	4	4	3	4	7	2	7	5	5	3	3	1		1	5		2	3	1	4		5	1

これほど徹底して「絵付き」しか使われないとなると、「文字書名」はあえて使用されなかったと言わざるを得ない。標題紙は1500年以前から用いられているが、年平均の使用件数は1500年迄が3点強であるのに対して、1501年からは7点強に増えている。この点から判断すれば、「文字書名」の不使用とは無標題紙本を増加させるためではなく、標題紙の表示形を「文字書名」から「絵付き」形へ移行させるための措置であったことが分かる。



¶ Nona perfectiois ocherwarke in englyshe/the byll of perfeccion

図3-1 (stc.278, 1496年)

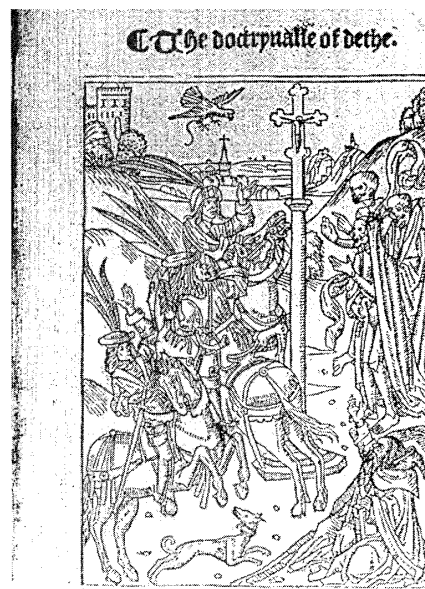


図4-1 (stc.6931, 1498年)

「絵付き」は1494年から1500年にかけて下記2形を使い続け、しかも1500年までは「文字書名」形と併用されている。

1. 絵+文字 (例、図3-1、stc. 278、1496年)
2. 文字+絵 (例、図4-1、stc. 6931、1498年)

そして1501年以降も上記2形を使う状況に変化はない（この2形式の推移については第8項で扱う）。「絵付き」の側が「文字書名」を「絵付き」へ移行させる理由は見当たらない。「文字書名」が1501年から消失し、「絵付き」へ移行したのはもっぱら「文字書名」側の理由によると見てよい。

5. 「ページいっぱいの表示」

ド・ウォードは標題紙表示の基準をどのように設定しようとしたのであろうか。「文字書名」は1501年から突然使用されなくなるが、1517年からは再び使用が始まる。その「文字書名」形の1つが図5-1 (stc. 25540+) である。この「文字書名」形は1517年から本格的に且つ継続して使用されるので、この表示形は彼の考えていた「基準」を充たしたとみてよい。他方、「絵付き」は1501年以降も使用され続けているので、この「絵付き」形も同様に基準を満たしていた事になる。

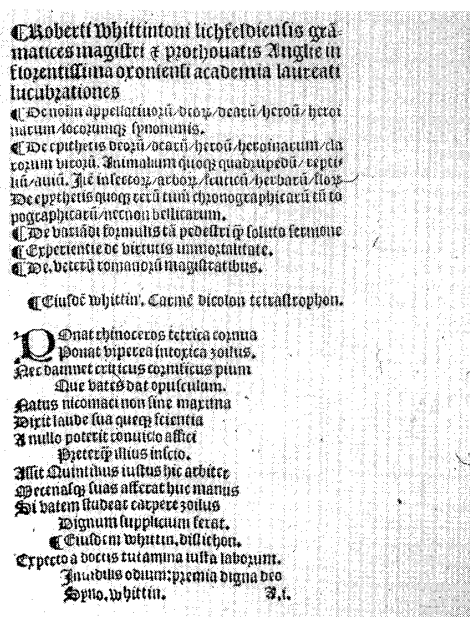


図5-1 (stc. 25540+, 1517年)

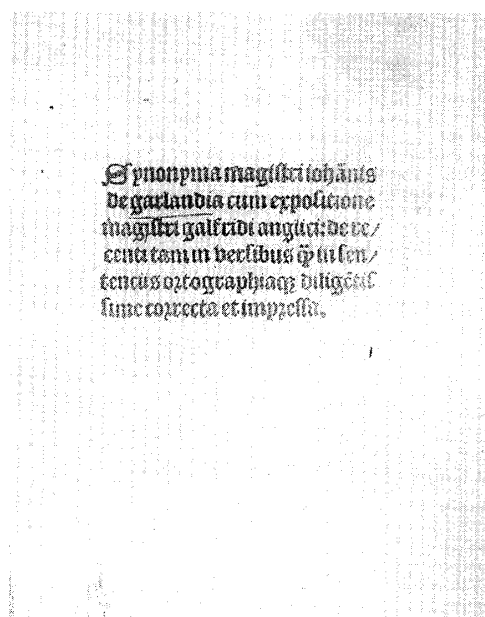


図5-2 (stc.11610, 1500年)

とすれば、「絵付き」形 (図1-1) と1517年からの「文字書名」形 (図5-1) に共通し、1500年以前の「文字書名」形 (図1-2) では充たせない表示形の条件あるいは「基準」とは何であろうか。そこでまず前二者を見てみよう。図1-1は真ん中の木版画を挟んで、その上部に6行、下部に4行の文字が配されているので、ページ全体がびっしりと埋め尽くされている。そして図5-1も31行にわたって文字表示をし、ページ全体が埋めつくされている。標題紙上に示す手段が絵であっても、文字であっても、ページ全体を埋め尽くしている点では、両図とも共通していることがわかる。

次に、同一書名本と言う条件で、1500年以前の本 (「文字書名」 (図5-2, stc.11610, 1500年)) と、1501年以降の本 (「絵付き」 (図5-3, stc.11613, 1502年)) とを比べてみよう。1500年の図5-2は文字書名を6行で表示しているが、書名を囲む上下左右には大きな余白が目立つ。それに対して1502年の図5-3は3行の文字表示であるが、行幅いっぱいに示され、且つ上部には木版の絵が配置されているので、ページ全体に余白が全く感じられない。図5-3も一言でいえば「ページいっぱいの表示」になっている。結局、ド・ウォードが標題紙に求めていたのは「ページいっぱいの表示」

(crowded title-page) だったのである。

1501年から始まった表示変更とは「文字書名」に「絵」を単に加えることではなかった。「絵」は「ページいっぱいの表示」の目的を達成するために追加されたのである。この点から判定すれば、図5-2が「ページいっぱいの表示」になっていないことは確かである。

1501年に始まった表示変更とは「ページいっぱいの表示」を目指すためという予想外の答えを生むことになった。しかしこの発想は現代の標題紙表示の発想と比べると全く異質である。そこで結論を急がず、この発想に立つと仮定してド・ウォードの用いた標題紙を調べてみよう。



図5-3 (stc.11613, 1502年)

The boke of Chaucer named
Caunterbury tales.

図6-1 (stc.5085, 1498年)

表6-1：文字書名の行数

行数	1493	94	95	96	97	98	99	1500	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
1			1	1			1	1																														
2			1			2		1							1																							
3	1										1																											
4																																						
5				2																																		
6								1						1																								
7以上																					1			5	4	3	1	2	1	1		1			1	2	1	

6. 「木版書名」(1495年)

1500年までの書名行数は、表6-1によると、3行書名が1点、5行書名は2点、6行書名は1点ある。それ以外の8点は、いずれも図1-2や図6-1 (stc.5085, 1498年) のように、1~2行である。活字のポイントが小さいこともあるが、2行で書名表示をしてもページに量感を出せず、余白ばかりが目につく。ましてや図1-2のような1行書名となると、思わず書名を見落としそうになる。

こうした状況下でド・ウォードは「絵付き」では図6-2 (stc.13439, 1495年) そして「文字書名」では図6-3 (stc.14507, 1495年) のような木版書名を使用したのである。イギリスで活字印刷が始まって多少の時間が経過し、これからさらに前進しようとする矢先に鉛活字とは異なる手段が用いられたことになる。活字印刷に逆行する動きと考えられなくはない。しかし木版だとたとえ書名が1行とか2行であっても、活字の3倍とか4倍の行数が得られる。「ページいっぱいの表示」を模索しているのであれば、木版書名はその目的に少しでも近づく手段とみなせる。



図6-2 (stc.13439, 1495年)



図6-3 (stc.14507, 1495年)

1492年に印刷を開始してからわずか数年後の1495年には早くも「ページいっぱいの表示」という考え方を試みていたことがわかる。ド・ウォードはかなり早い時期から「標題紙の採用」そして採用したときには「ページいっぱいの表示」を模索していたといえる。従って、木版書名の採用は活版印刷に逆行する動きと言うより、標題紙をなんとしてでも採用したいという気持ちの表れと考えられる。とすれば木版書名の活用はむしろ活版印刷を促進するための積極的な試みであったと評価し直す必要がある。

しかし木版は、絵でも、文字でも、制作時間と費用がばかにならない。それでも絵であれば、類似の作品に活用できる。1回だけの使用に留まらず繰り返し使えるので、費用が無駄にはならない。ところが書名を木版で表示すると、同一作品には使えても、別の作品に使うことはできない。多くは一回限りの使用に留まり、活用の余地はない。費用がかさむにもかかわらず、汎用性がない。となれば、最初は使ったとしても、次は二の足を踏み、ひいては使用しなくなるはずである。それに1回しか使わない木版を使っていたのでは、活字という繰り返し使える工夫とも相容れない思想である。行数を簡便に増やすことは出来るものの、採算は度外視できなかったはず

である。1495年を除くと、木版書名だけで標題紙表示をすませる事はなかった。

木版表示の試み以外では、1行の幅を狭めて行数を増やそうとする努力が見られる。しかし行間や字間を法外に開けるような活字組みはしていない。標題紙と言えども、本文ページと同じ法則で活字組みをするという考えが根底にあったことがうかがえる。そのため、図5-2のように、長い書名の場合は改行すれば行数を増やすことができるが、こんどは四隅の空気が目立ってくる。ましてや書名の語数が少ないと、改行することすらままならない。答えの見つからないままに、15世紀は幕を閉じることになった。

7. 「絵付き」形の表示目的

新しい世紀に入ると1501年にド・ウォードは住み慣れたロンドンはウェストミンスター寺院からフリート街に転居した。「業務を拡大するのに手狭であった」ためとモランは転居理由を推定している⁽⁶⁾。ド・ウォードが1501年から「文字書名」を「絵付き」に移行させたことは前述した通りである。業務拡大の一環として取り組んだのが「文字書名」形をどう表示するかの問題だったのではないだろうか。

そして「文字書名」を「絵付き」で表示するように計画変更をすると、「絵」は標題紙上の飾りから、「ページいっぱいの表示」をするための補助手段に代わったのである。見た目の変化は全く見られなかったが、「絵」の使用目的は大いに異なることになった。プロマーが「ド・ウォード本で目につくのは絵を使うのが好きなことである。絵の付いていない本のほうが少ない。学術的な作品の標題紙にすら生徒に教えている先生の絵が使われている」といっている⁽⁷⁾。しかしド・ウォードが好き好んで標題紙に絵を使わけてないことは前述したとおりである。

文字だけで表示したい時に絵を併用するのは本意でない。しかし1501年の時点で「文字書名」単独では「ページいっぱいの表示」に対する解決策を見い出せない以上、この条件を簡便に満たせる「絵付き」に移行せざるを得ない。従って「絵付き」形は答えを出すまでの時間稼ぎであり、緊急避難的な表示形となってしまった。ド・ウォードにとって「ページいっぱいの表示」という条件は標題紙表示をするときに非常に脅迫的な力を持っていたことがわかる。

しかしこれで基本的に事が解決したわけではなかった。絵を使うと決断しても、使用できる絵を所有していなければ、当初の目的を達成できない。絵は制作費がかさむばかりでなく、種類も揃えておく必要がある。しかしド・ウォードは目的に答えられるだけの絵を備えていなかった。

表7-1：印刷者マークの使用件数

年号	1502	3	4	7	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	22	24	26	28	30	32	35
件数	2	1	1	1	1	2	6	3	2	2	1	4	4	1	3	4	1	1	1	2	1	1	1

表7-1（印刷者マークの使用件数）をみると、1502年から印刷者マーク（Device）が急に使用され出すのが分かる。このマークはそれまで標題紙に一度も見かけなかったもので、意図的な使用が

考えられる。図7-1 (stc.12472, 1502年) からわかるように、標題紙上で用いた印刷者マークはどれも比較的大きなデザインなので、標題紙上でかなり大きなスペースを占めることができる。印刷者マークが木版画と同じ目的で使用されていることは明白である。その後、使用数は増えていくが、1521年からは間欠的に使用するにとどまってしまう。印刷者マークもしょせんは標題紙上の空間を埋めるための細工でしかなかった。

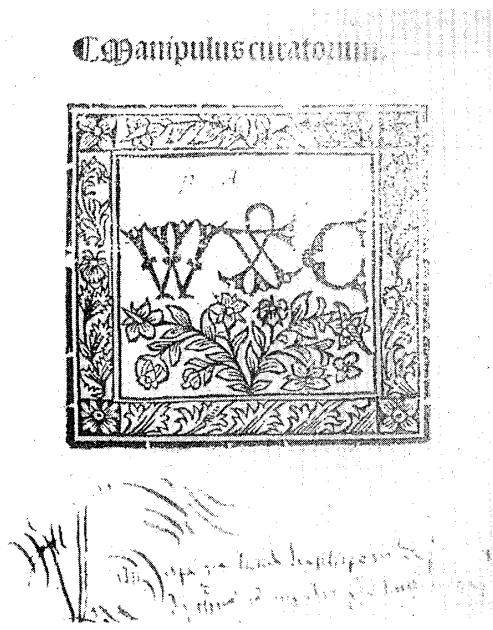


図7-1 (stc.12472, 1502年)

8. 「文字+絵」の順 (1506年～)

「絵付き」に移行してしばらくは妙案が見つからず、「絵」を付けてとりあえずしのぐ期間が過ぎていった。そして答えられないという鬱屈を払いのけるかのごとく、1506年になると、一連の表示形が堰を切って試みられることになる。もっとも「ページを埋め尽くす」という目的ははっきりしていたので、それに沿った試みであったことは確かである。

表8-1: 「絵+文字」と「文字+絵」の使用件数 (印刷者マークは含まない)

	1494	95	96	97	98	99	1500	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
絵+文字	1	1	5	3				1	4	1					1	4						1
文字+絵		4	6	3	4	7	3	1	2	3	1	2	9	5	12	16	13	6	9	5	8	

	1515	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
絵+文字				1			1				1		1		1						
文字+絵	12	5	14	12	13	12	8	3	3	2	13	7	3	7	7	15	4	10	5	5	2

「ページを埋める」ために「絵」を使用するにしても、書名と絵とをどの順序で示せばよいのだろうか。表8-1によると「絵+書名」順、「書名+絵」順のいずれも用いられていることがわか

る。しかし1504年から、「書名+絵」順が主流となり、「絵+書名」順は散発的にしか使用されなくなる。



図8-1 (stc.25546, 1519年)



図9-1 (stc.5199, 1506年)

「絵+文字」の場合、図3-1を見るとわかるように、文字表示を絵の次に配置するので、文字の下部に余白が残り、ページ全体を埋め尽くしていない。それに対して図8-1 (stc.25546, 1519年)のように、「文字+絵」順にすると、絵の下に大きな余白が残っても、余白は図柄の余韻とみなせる。余白に対して、こうした考え方をすることによって、「文字+絵」の順序を主流にしていたのではないだろうか。加えて、この順序表示は利点を備えていた。木版の絵は繰り返し使用できるが、同じ絵で始まるために別の内容の本の場合に即座に識別しにくい。それに対して、文字書名を先に表示すれば、例え同じ木版を使っているとしても、書名の異同で本を即座に識別できるからである。

9. 飾り表示 (1506年)

しかし「文字+絵」の順に表示すれば問題が解消したわけではなかった。ド・ウォードは書名を取り巻く周囲の余白も気にしていたからである。そのため「絵付き」にさらに飾りを追加するという、まさに屋上屋の表示形が表れた。例えば、図9-1 (stc.5199, 1506年)は書名を木版で表示しているし、図9-2 (stc.17540, 1514年)では書名が「巻き軸」の中に入っている。このような細工をして書名の周りの余白を消去しようとしたのである。

余白の扱いについては、同書名本を使ってさらに比較してみよう。1496年の図9-3 (stc.17539, 1496年)では2行書名の上下左右が空いているように見える。それに対して1514年の図9-2では「巻き軸」が使われているので、「巻き軸」は余白対策であったことが分かる。

表3-2からわかるように、1501～1504年にも1行書名が使用されているが、それらにはいずれも飾りが付いていない。ところが1506年を境にして、この1行書名の表示形に変化が出てくる。1～3行書名を抽出した表9-1を見ると、1506年以降の1行書名と大半の2行書名には巻き軸形と木版書名が使われているのである。3行の巻き軸書名は1点（stc.23164.2, 1507年）しか用いられていない⁽⁸⁾。巻き軸形と、木版書名形は1～2行書名を使うときに生じる余白を埋めるために案出された細工であることがわかる。この2表示形は飾るのが目的ではなくて「ページを埋め尽くす」表示を目指していたと考えてよい。



図9-2 (stc.17540, 1514年)



図9-3 (stc.17539, 1496年)

表9-1：1～3行書名

	1506	1507	1508	1509	1510	1511	1512	1513
標 絵 題 付 紙 き	1380.5 E 3	21430 E 2W	253 E M 1	P 3547 E M 1	12091 E M 1	5574 E M 1	P 4839.7 E M 1	254.3 E M 1
	5199 E 2W	23164.2 E M 3	P 7706 E 2	P 12475 E 1大	P 14518 E M 2	P 6573 E M 1	P 6470 E M 1	3290 E M 1
	12381 E M 1		13604 E M 2	12943 E M 1	15345 E M 1	18567 E M 1		23153.10 E M 1
			P 16120 E 3	12943.5 E M 1	P 17016 E M 1	P 21336 E M 2		
			P 17971 E M 1	14572 E M 2	21286.3 E 1W			
			P 21262 E M 2	15258 E M 1	23167 E M 2			
			P 23164.4 E M 2	17537 E M 2	P 23178 E M 2			
			25007 E 1W	18566 E 1W	23430 E 1W			
				19305 E M 1				
				P 21007 E M 1				
			23164 E M 1					
			23195.5 1W					

	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528
標 絵 題 付 紙 き	P 6895 EG 2	P 17499 EG 3	14083 EG M 1	P 1918 EG M 2	P 6897 EG 2大	P 966 EG M 1	10002 EG 2
			15579 EG M 2	P 3266 EG M 1	P 6897.5 EG 2大	P 6836 EG M 1	P 17974 EG M 1
				P 10608 EG M 1	P 15399 EG M 2	P 23197 EG M 1	P 21008 EG M 1
				14044 EG M 1	P 17532 EG 3		22411 EG M 1
				18528 EG M 1	P 23168.7 EG M 2		
				P 23182 EG M 2	P 23169 EG M 2		
				P 23196a.6 EG M 1	P 23182.2 EG M 2		
				P 25417 EG 2			

白への恐怖、黒へのあこがれ

	1514	1515	1516	1517	1518	1519	1520	1521
標 題 付 紙 き	P 169.5 E M 2	P 272 E 3	P 10627.5 E 1N	P 3547a E M 1	5953 E M 1	P 5609 E M 1	P 6833 E M 1	P 10631.5 E 1N
	P 6035 E M 1	P 318 E 3	P 17498 E 3	P 7015 E 3	P 11617 E 3	P 5609.5 E M 1	P 10631 E 1N	P 23168 E M 2
	P 6035.5 E M 1	9985 E 2		P 11407 E M 1	P 15578 E 1	17973.5 E M 1	P 17027 E M 1	
	P 11616 E 3	14039 E M 1		P 21071 E M 1	18568 E 1W	P 20876 E M 2	P 17038 E M 1	
	17540 E M 1	17026 E M 1		P 22558 E M 1	P 18875 E 1	P 20894.7 E 1大N		
22557 E M 1	23013 E M 1		P 23185 E M 2	P 23154 E M 2	P 23147.6 E 2			
24814 E M 2	23196 E M 1		P 23196.2 E M 1	P 23167.3 E M 2	23196.8 E M 1			
	23428 E M 1			23429 E M 1				

	1529	1530	1531	1532	1533	1534
標 題 付 紙 き	P 23174 EG M 2	P 3267 EG M 1	P 23183 EG 3大	P 5610 EG 2大	P 14045 EG 1大	P 23174.7E 大 3
	P 23182.6EG M 2	17541 EG M 1	P 23244 EG 2大	P 6035a EG 1大		P 23184.5E 大 3
	P 23198 EG M 1	19119 EG 2大		6932 EG 1大		P 23198.7E 大 2
		P 20413 EG M 2		P 10839 EG 3大		
		P 22559 EG M 2		P 17975 EG 1大		
	P 23174.5 EG M 2		P 18570 EG 1大			
			P 22560 EG 2大			
			P 25421.6 EG 1大			

M 巻き軸
N 巻き軸を使わない1行書名
W 木版書名

E : 絵
大 : 大文字
G : ゴシック

付属の欄の数字は行数

10. 「木版書名」(1506年～)

木版書名は当初(1506～1507年)、2行書名用として採用された。1508年からは1行書名用に変更されるが、1510年を最後に使用されなくなってしまう⁽⁹⁾。「文字書名」でも「絵付き」の場合でも表示行数を多くしようとした最初の試みが「木版書名」の採用であった。非常に興味深い行動である。行数を多くするという点だけを考えれば、「木版書名」は手っ取り早く、魅力的な手段であったかもしれない。しかし前述の「文字書名」そして「絵付き」とで2回に渡って採用が試みられたものの、木版書名の内包する欠点を克服できず、木版書名の採用は失敗に終わってしまった。

11. 「巻き軸」(1506年～)

それに対して同じく1506年から採用された巻き軸は、図9-2のように、中空の図柄なので、繰り返し使用できる。図柄自体も一般的で、特徴がない。おかげでどんな絵(木版画)とも調和させられる。当初1行書名用として使用され出したが、木版書名の不適合さもあって、すべてではないが2行書名の表示用としても使われるようになる。そして木版書名の使用を中止すると、巻き軸は唯一の1行及び2行書名の「ページいっぱいの表示」用として1530年まで20年以上の長期に渡って使用され続けることになった。

1506年や1507年の動きからすると、1行書名には巻き軸を、2行書名には木版を使い、行数を増やそうとしたことは前述した通りである。そしてこうした措置を必要としないのが、表9-1が示しているように、(絵付きの)3行およびそれ以上の書名である。ということは巻き軸も木版書名も3行表示を目指した工夫であったことがわかる。といってもわずか3行しか埋められないので、絵と併用しない限り「ページを埋め尽くす」という最終目的を達成することはできない。1行や2行の少数行ではページを埋められないために、ド・ワードは表示行数を増加させるための工夫で

悩んでいたことがよくわかる。「ページを埋め尽くす」という表示思想が標題紙表示にとっていかに重大な思想であったかがわかる。

これまでに試みられた巻き軸や木版書名のような表示形は書名表示自体に細工を施して行数を増やそうとする試みであった。しかしこの方式では書名が短いとどう細工をしても、大幅な行数増は期待できない。となると別の視点に立った方策を案出する必要がある。そこで次に考え出されたのが書名以外の要素を付加して行数増を計る方法であった。そして当然のことであるが、後年の細工ほど表示行数は増えていく。もっとも書名以外の要素を付加する方法は次に述べる「印刷事項」が最初ではなかった。書名以外の事項を追加しようとする工夫は1501年の「絵」から既に始まっていたのである。

12. 「印刷事項」(1509年～)

「ページいっぱいの表示」をしようとしたとき、書名以外の事項を追加する工夫は容易に思い付くかもしれない。しかし追加内容を毎回考えていたのでは、事項を追加する人にとって大きな負担である。追加事項とは、苦勞しないで作れ、しかも常に一定の行数が確保できる形でないといけない。その点、印刷者名、所在地、年号(「印刷事項」)であれば常に同一の表示なので、作成者は苦勞しないで追加表示をすることが可能である。表示行数も、後述するように、だいたい一定している。「印刷事項」は追加事項の要件を充たしていたと言える。

この点を実証するのが表12-1(書名+文字+絵)である。前述したように、標題紙上には原則として先ず書名が示され、その後は次のいずれかの順に並んでいる。

1. 「追加事項(文字)+絵」
2. 「絵+追加事項(文字)」

表12-1は「1」(追加事項(文字)+絵)を後に従える場合、その前の1～3行書名の飾りがどんな状態かを示している。

表12-1(書名+文字+絵)

	1509	1510	1511	1512	1513	1514
標題紙	P 16121 E T3.Im4.E	P 254 E T2.Im4.E.Epi4	1966 E T1.Adv3.E	P 25447 E T1.Cont9.E M		P 16125 E T3.Im3.E
	P 23941 E T1.Im4.E	P 15576 E T2.Im4.E		P 25541 E T2.Im4.E		
		P 15576.8 E T1.Im3.E				
		20883 E T1.Adv4.E M				

	1515	1516	1517	1518	1519	1520
標題紙	P 271 E T1.Im3	25479.5 E T1.Con.12.E	P 16128 E T3.Im4.E	P 15578 E T1.Im4.E	P 25446 E T3.Con9.E	P 10450.7 E T3.Con.5.E
			P 25479.6 E T1.Con.12.E		P 25499 E T3.sti.10.E	P 25479 E T2.Cont.10.E
						P 25479.14 E T2.Cont.10.E

	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527
標題紙	965 EG T1.Adv.4.E M	P 389 EG T1.Adv.8.Im.3.E	P 15934 EG T3.Imo.3				966 EG T1.Adv.5.E M
	14558 EG T1.Adv.3.E M						

白への恐怖、黒へのあこがれ

	1528		1529		1530		1531		1532		1533		1534	
標 題 紙					P 5092 EG	T1,Adv.3,E			P3183.5 EG	T2,Adv.7,E	P25008 EG	T2,Adv.7,E		
					P15578.7EG	T1.Imp.4,E								
絵 付 き														

M 巻き軸

表12-1によると、「巻き軸」は1行書名に使われていることが分かる。ところが同じ1行書名でも、「Im」（印刷事項）が後に続くと、「巻き軸」は使われていない。この形は図12-1（stc.1497, 1509年）を見ると分かるように、書名と「印刷事項」との切れ目がないので、一連の文字表示のように見える。そのため例え1行書名でも、3行や4行の書名表示のように見える。となれば、「巻き軸」を使う必要はない。再三述べるように、「巻き軸」が1行や2行の書名表示に対する工夫であることは明らかである。

それに対して、1～3行書名の後に「絵+追加事項（文字）」が続く場合の一覧が表12-2である。この表示順では書名の後にすぐ「絵」が来るので、書名の周りに余白が生じることは避けられない。そのため特に1行書名では必ず「巻き軸」に入っている。しかし2行書名では「巻き軸」に入っている場合と、入っていない場合とに分かれる。

表12-2（書名+絵+文字）

	1510		1511		1512		1513		1514		1515				
絵	P 14864E	T1,E,Adv7	M		P 25525 E	T2,E,Cont3	M	P25509.5E	T2,E,Cont3	M	P14864.5E	T1,E,Adv.7	M		
	1516		1517		1518		1519		1520						
絵	P 25510	T2,E,Con3	M	P25511.5E	T2,E,con.6		P 1385 E	T2,E,Prolog	P 25540 E	T2,E,Con12	P10450.5E	T2,E,Imp.4			
							P 18475	T1,E,Adv.5							
	1521	1522	1523	1524	1525	1526	1527	1528	1529	1530		1531	1532	1533	1534
絵										P 18475 EG		T1,E,Adv.5	M		

M 巻き軸

図12-1（stc.1497, 1509年）の8～10行目には次のような印刷事項が示されている。

Impressi lo[n]doniis [per] wynandu[m] |
de worde (i[n] the fletestrete) ad si|
gnum solis moram trahe[n]tem.

1509年から使い始めたこの表示形は図12-1からわかるように地名（Londoniis）と印刷者名（Wynandum de Worde）だけで、印刷年はない。印刷年は1530年以降で、それも囲み飾りを用いている場合に限って示されている⁽¹⁰⁾。

印刷事項の表示行数は、図12-1だと行頭から始まっているが、行中あるいは行末から始まるかによって、この事項が3行となったり、4行に増えたりする。しかし5行になることはない。上限で4行増やす工夫であった。この工夫は最少でも3行表示となるので、そこに書名が加われば、3

行以上の表示形となる。事実、1509～26年間で4行 (stc.23941, 1509年) から12行 (stc.15948, 1526年) まで見かける⁽¹¹⁾。

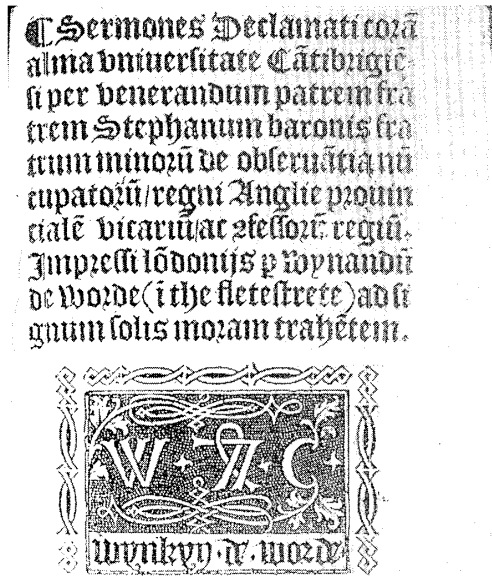


図12-1 (stc.1497, 1509年)

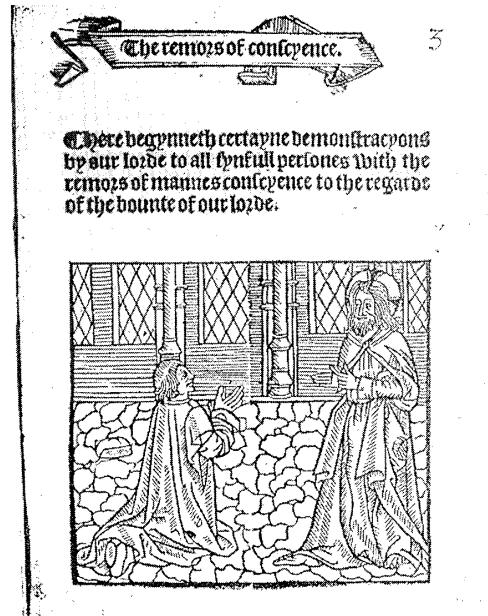


図13-1 (stc.20883, 1510年)

表12-3：1509年型印刷事項

	1509		1510		1511		1512		1513		1514		
書	給付	P 1497	T7,Im3,Dev	P 254	T4,Im4,Dev	P 13831 G	T5,Im3,Dev	頭20437	T4,Im3,Dev	P 22580 E	T9+E+Im3	P 13832	T6,Im3,Dev
	付	P 16121 E	T3,Im4	P 15576	T2,Im4,Dev	頭 20436	T4,Im3,Dev	P 25541 E	T2,Im4 E			P 16125	T3,Im3,Dev
名	付	P 23941 E	T1,Im4	P15576,8E	T1,Im3	23427a.3	T6+Dev-Im3						
	き												
冊													
み													
飾													
り													

	1515		1516		1517		1518		1519		1520		1521	
書	給付	P 271 E	T1,Im3	頭 20438	T4,Im3,Dev	P 16128 E	T3,Im4	P 13837	T5,Im3,Dev			P10450,5E	T2+E+Imp.4	
	付	P 16126	T4,Im3,Dev					P 15578 E	T1,Im4 E					
名	付													
	き													
冊														
み														
飾														
り														

	1522		1523		1524		1525		1526		1527		1528	
書	給付	P 389 G	T1,Con.8,Im3Dev	P15934EG	T3,Imp.3								P 13836 G	T5,Imp.3 Dev
	付												頭20439 G	T4,Imp.4 Dev
名	付													
	き								(P15948)dG	T8,Imp.4 Dev			(L24944) dR	T12,Imp.2
冊														
み														
飾														
り														

	1529	1530	1531	1532	1533	1534
書名		P15578.7EG T1,Imp.4				
囲み飾り		(13812)dR T3,Imp.3 Dev		(P6126) dG T2,Imp.4	(15602) R T10,Imp.2 (L15608) dR T11,Imp.5 (L21827) R T11,Imp.2 (P25477) dR T8,Sti.9+ Imp.2	(L5543) dR T8,Con.5+Imp.3
絵付文字		P 1912 EG T3,Imp.3 P12947 EG T12,Imp.1				

T : 書名 con : 目次 d : 分割囲み飾り () : 囲み飾り
 E : 絵 sti : 連句 R : ローマン L : 葉の飾り
 Imp : 印刷事項 Epi : 碑文 G : ゴシック P : パラグラフマーク

しかし平均7行のため、文字行数はページの半分しか占めていない。結局、「印刷事項」も絵と併用すれば使えるが、そうしない限り「ページいっぱいの表示」という目的は達成できなかった。

この「印刷事項」は「絵付き」でも、「囲み飾り」内でも用いられている。「囲み飾り」内で使用されるときは、書名から切り離して表示されるが、「絵付き」では書名と同じ大きさの活字を使って、図12-1のように、書名に続けて表示されている。おかげで書名を読み続けていかなければ印刷事項は発見しにくい。これでは印刷者名を宣伝しているとは言えない。

それに表12-3から分かるように、「印刷事項」は37点に用いられているものの、その内の16点はHortusの *Vocabulorum* (5点), *Liturgies(Expositio)* (3点), *Promptorium* (4点), *Libellus* (4点)の4書名に集中している。もし印刷事項が標題紙に必要な表示情報であるならば、多くのあるいは全ての本に提示する必要がある。しかし彼はこの表示形を総ての出版物に用いようとしたわけではなかった⁽¹²⁾。ド・ウォードは印刷事項を早くも1509年から使い始めたと思いたいところであるが、これでは印刷事項として機能していないことがわかる。結局、1509年からの印刷事項は行数を増やすための一方策として試みられたにすぎなかった。

なお、1528年から「印刷事項」表示は別の展開を見せる。囲み飾り内で使用される「印刷事項」は書名から切り離され、現在見かけるような、標題紙の下部に表示されるようになるからである。

13. 「here 説明文」(1510年～)

そして1510年になると図13-1 (stc.20883, 1510年)のように1行書名に「here」で始まる内容説明を付けた細工が考案された。しかし「here 説明文」は、「印刷事項」と違って、追加内容を毎回考えなければならぬので、表13-1を見るとわかるように、使われ方はかなり散発的である。

しかもこの工夫は「here」で始まるため、書名の後に続けて表示しても、書名の続きとして扱うことはできない。標題紙ページを埋める役割は果たせても、「印刷事項」のように、書名の長形化には繋がらなかった。おかげで特に1行書名は「巻き軸」に入れて表示せざるを得なかった。その様子は表13-1に示したとおりである。なお、1532～34年の2行書名には大形活字が使われている。

結局、この工夫は一般的な表示形式を目指したのではなくて、1行書名の行数を増やす目的で用

いられた形式であったことがわかる。この工夫をすると最小で3行を確保できる。巻き軸は3行表示の目的で使用されたことから、この工夫と併用すれば最小で6行表示できることになる。しかし6行ではとても「ページいっぱいの表示」をすることはできない。「絵」と併用しなければならない状況は依然として続いた。

表13-1：「here」説明文

		1510		1511		1512		1513		1514		1515		1516		1517	
書 名	給 付 名	P14864 E	T1, E, Adv7 M									P14864.5E	T1+E+Adv7 M				
		20883 E	T1, Adv4 E M										20881.7E	T1, Adv4, E M			
		1518		1519	1520	1521		1522		1523	1524		1525		1526		
書 名	給 付 名	P18475 E	T1, E, Adv.5 M			965 T1, Adv.4 E M		P389EG T1, Adv.8, lm.3									
						14558 T1, Adv.3 E M											
		1527		1528	1529	1530		1531		1532		1533					
書 名	給 付 名	966 EG	T1, Adv.5, E M			P5092EG T1, Adv.3 E M				P3183.5EG T2, Adv.7, E		P25008E T2, Adv.7, E					
						P18475EG T1, E, Adv.5 M				(10467)dR T6, Adv.7							

注

- (1) Plomer, H.R. *Wynkyn de Worde & his contemporaries from the death of Caxton to 1535*. London, Grafton, 1925. pp. 45-46.
- (2) Bennett, H.S. *English books & readers, 1475 to 1557*. 2nd ed., reprint ed. 1970. pp. 242-276. モラン (Moran, James) は 829 点としている (*Wynkyn de Worde*. London, Wynkyn de Worde Society, 1987, p. 14)。計算間違いではないだろうか。
- (3) 本稿の図版はいずれも University Microfilm の *Early English books, selected from Pollard and Redgrave's Short-title catalogue* (東京大学総合図書館所蔵) を使用した。例外に関してはそれぞれに所蔵館を提示する。
- (4) 高野彰「初期英語本標題紙史序説」『大学図書館研究』第58号 (2000年3月) pp. 89-94.
- (5) 高野彰「十五世紀英語本標題紙史」『図書館情報学の創造的再構築—藤野幸雄先生古希記念論文集』(勉強出版、2001年) pp. 365-387.
- (6) Moran, J. *Wynkyn de Worde*. London, Wynkyn de Worde Society, 1987. p. 17.
- (7) Plomer, H.R. *op. cit.* p. 65.
- (8) 大文字を使った1行書名については後述した。
- (9) 唯一の例外は1518年の stc.18568 である。
- (10) マッケローは「ウィンキン・ド・ウォードとピンソンが自分の名前を奥付以外の場所に提示することはほとんどなかった」と言っている (McKerrow, R. B. *An introduction to bibliography for literary students*. Oxford, At the Clarendon Press, 1927, 1967. p. 96.)。しかしド・ウォードは、図12-1のような形で、印刷者表示を採用している。マッケローは何を根拠に発言したのであろうか。
- (11) 1513年に12行 (stc.22580) も使われているが、これは外国で印刷されているので除外した。1522年にも12行 (stc.389) を見かけるが、これは目次との併用形である。
- (12) 1. Hortus の *Vocabulorum* (stc.13831, 13832, 13834, 13836, 13837)
 2. Liturgies の *Expositio* (stc.16125, 16126, 16128)
 3. *Promptorium* (stc.20436, 20437, 20438, 20439)
 4. *Libellus* (stc.15576, 15576.8, 15578, 15578.7)

表1：全体表

	1492	1493	1494	1495	1496	1497	1498	1499	1500	1501	1502	1503	1504	1505	1506	1507	1508	1509
標			E14042	1 E11024 13438 F(W) P13609 E	2 EP278 1 E1916 1 P1917 E E5759	2 EP279 1 E284 P21335 E	3 P6931 E1 1 13440 E11 Adv.4 E P21335 E	1 P3810 E P17104 F P21335 E 23427 E	1 P21798 E5 5		3 EP285.5 P11603 Dev3 E11613 P12472 Dev1 Dev15899 Dev15376	1 169 E 3 319 F 3 370162 E 1 Dev15899 7	1 16256 Dev1 2 3	3 P15806 Dev4 2 21430 F(W) 5 23164.2 E 12381 E P14863 E P21259 E	3 1380.5 E 3 5198 F(W) 5 23164.2 E 12381 E P14863 E P21259 E	3 P15806 Dev4 2 21430 F(W) 3 P9351a E 13604 E P16120 E P17971 E P21262 E P23164.4 E 25007 F(W)	253 E P7706 F 3 P9351a E 1 P12475 E 13604 E 3 12943 E 1 14572 E 2 15268 E 1 P16121 E 17537 E 18566 F(W) 19305 E 231007 E 23164 E 23195.5(W) P23941 E	1 P1497 Dev 2 P3547 F 1 P12475 E 1 12943 E 3 12943 E 1 14572 E 2 15268 E 1 P16121 E 17537 E 18566 F(W) 19305 E 231007 E 23164 E 23195.5(W) P23941 E
繪																		
圖					(19213 E(W) 1													
飾																		
D																		
文		P5065 3		1536(W) 14507(W)	2 EP19440 1 9353 5 9354	1 11610 6 P13829 1 14081 2	283 2 5085 2	P282					16231 3		P22270.5 6		387 7016.5	2 4
字																		
H					E題P3309 7016 E EP17965	5 F787 2 19439 E E17011 E 24866 E12	2 P15397 E2 1 24876 E2	17967 E P20412 E P22587 E	1 17006 E3 2 P24224 E4 2	1 E5109 P13827 E P200493.3 E12			P12945 E2 P18779 E2	2 P788 E P13688 E P17033.7 E	2 P3543 E 2 P6034 E 2 P13685.5 E	6 P3289 E 3 P10081 E 10 EP10902 P13686 E EP10903 EP10904	1 P4592 E 2 P10891 E 10 EP10902 2 EP10903 EP10904	
紙																		
E																		
R																		
字																		
P	P24766	P24234	EP3261	P12955+ P17032a	P286 9350 EP9349 9351a.7 EP21334	285 P287 P13609	E17005	E5573 E3643 P7010 P17247	EP1978 P14546 EP17007 EP17020 EP17022 E17031 P21070 P24766.3	P14924	9997			P295 P4688	EP4689 15398			
T																		
N	P3304	24875E	14087	7009+23163.4 14098 14098.5 17020 17723	5572 5769a 13608.7	9996	802 14102 19327 20414	14077C.148 17726	1987 1987.5 7541 S.9352	S.9355.5	15898	15377 17249	23427.7	792 793 1008 1009 5728 14842a 19207a 19208	11721.5	3265 15257.5 24878.3	7502.5 15908	12948 13075 15808 E 16160 20107 24154
O																		
R																		

() 冊本飾り 頭: 頭文字 Epi: 碑文 冊: 冊番号 Por: 序 Adv: 内容説明 Com: 目次 CP: Cum privilegio R: ローマン G: ゴシック Im: 印刷事項 dt: 分割 Stu: 述句 Dev: 印刷者マーク T: 番号

